

古代文明研究と現代社会 —人間とモノの関係を巡る思索—

関 雄二

文化を不要不急の対象とみることの多い昨今だが、われわれ文化人類学者からすれば、じつに奇妙といえる。文化とは、能、文楽、歌舞伎、茶の湯や生け花のような、いわゆる伝統芸能だけを指すものではなく、日常生活や社会関係、それを支える思想や観念まで、人間の活動の総体であり、存在基盤だからである。しかも人類という一つの種だけが地球上の様々な環境に適応し、大規模な拡散を遂げることができたのは、文化あつてのことである。コロナ禍の今だからこそ、文化と真摯に向き合うべきなのではないだろうか。

拡散する人類が最後に足を踏み入れた大陸がアメリカ大陸であり、少なくとも1万4000年前にさかのぼる。主に熱帯地方で暮らしてきた人類がユーラシア大陸を北上し、氷河の発達で海水面が低下して現れたベーリンジアの陸橋を渡ることができたのは、顔の凹凸や体毛を減らすなど、寒冷地に適した肉体を手に入れたばかりでなく、狩猟により毛皮を入手し、衣服や舟の素材に加工し、文化的適応に成功したからである。

アメリカ大陸に進出した人類は、広がる氷河を避けつつも南下し、その後各地に定着した。やがて人類は、採集狩猟や漁労生活を経て、農耕を開始し、中米メソアメリカ地帯と南米アンデス地帯で文明を築いた。私の研究対象であ

るアンデス文明では、マチュピチュを築いたことで有名なインカ帝国に至る4000年以上もの古代文化の変遷が確認されている。まずは、その研究を紹介しよう。アンデス地帯では、紀元前4000年頃には漁労や農耕による定住村落が出現するのだが、その後しばらくして、突如、大型の祭祀建造物が出現する。まわりくどい表現なので、ここでは神殿と呼んでおく。

私が学生時代に教わった文明形成理論は、小集落から大集落へと人口が増加し、闘争や統合を経て、やがて社会階層が成立した後、権力者の存在を支えるような宗教やイデオロギー装置として神殿が登場するというものであった。これは旧大陸のメソポタミア文明の研究から生まれた考えである。もうお分かりとは思いますが、アンデス文明にはこの見方があてはまらない。アンデス地域では、漁労や農業が存在したといっても、権力者を支えるような余剰生産物を抱えた社会が生まれていないのに、巨大な神殿が築かれたからだ。

この摩訶不思議な文明形成過程を世界で初めて明らかにしたのは、じつは日本の調査団である。戦後草分けの海外調査の一つとして、1958年に東京大学の研究者によって結成され、研究の拠点を移しながらも、私でもう6代目になる。1960年には、ペルー中部高地に位置するコトシュと呼ばれ

る先土器の神殿を発見し、世界中に衝撃を与えた。先の古典的な理論が主流であった当時、神殿の登場が土器製作に先立つことなど、誰も想像していなかった。



1963年のコトシュ遺跡の発掘（提供：東京大学アンデス調査団）

とはいえ、旧大陸にはない文明の形成過程を捉えたのは、正確にいうと、コトシュ遺跡の発見時ではなかった。その発見から40年経った1998年、コトシュ調査にも携わった大貫良夫東大教授（当時）が定年退官を迎えた。この記念に『文明の創造力』（角川書店）を同僚の加藤泰建埼玉大学教授（当時）と編集し、大貫教授に捧げた。その過程で、日本人研究者による40年間の研究を総括する作業を行い練り上げたのが、アン



コトシュ遺跡における神殿更新。部屋を埋めて、同じような段差のある床面をしつらえた部屋を築いた痕跡が見える。
提供：東京大学アンデス調査団

デス文明独自の成立理論であり、これを私たちは「神殿更新論」と名づけた。

1998年当時、発掘を終えていたペルー北高地のワカロマ遺跡は、コトシュ遺跡の1000年も後に築かれた神殿であり、規模もずっと大きい。どちらの神殿も一度に建物ができあがったわけではない点で共通している。神殿が建設されては壊され、あるいは埋められ、その上に同じ形状の神殿が築かれるという更新活動が認められたのである。

しかも、コトシュでもワカロマでも、権力者の存在を示す証拠はなく、余剰生産物を備蓄する倉庫も見当たらなかった。平等性の高い社会を推測せざるをえない。つまり、権力者が社会の構成員を強制的に働かせ、巨大な神殿を築かせるようなイメージは誤りであり、むしろ社会構成員による自主的な神殿建設や更新を推測せざるをえないのである。さらに、更新を繰り返せば、労働力やそれを支える食料の確保、さらには作業の統御が必要となり、やがて社会の中に役割分担や階層が生まれる。神殿が築かれたから社会が複雑化するという見方は、メソポタミア発の文明形成論とは真逆の考えである。

いずれにせよ、4000年にわたるアンデス文明の、ほんの初期の



1985年のワカロマ遺跡の発掘。神殿更新の結果、100mを超える長さの基壇が造られた。(提供：東京大学アンデス調査団)

現象についての見通しを得るまでに40年もかかったことになる。人類史の解明はなかなか手強い。

その後も、私はこの「神殿更新論」をブラッシュアップし続けている。次なる課題は、なぜアンデスの人々は神殿を更新し続けたのかという点であった。この思索過程で出会ったのがマテリアリティ研究であり、社会学の実践理論であった。いずれの分野も、人間と、その人間の手によって生み出される道具やモノ（物質文化）との関係に注目する分野だ。

マヤのピラミッドであれインカの神殿であれ、王の権威の象徴として捉えることが普通だし、わかりやすい。しかし、マテリアリティ理論や実践理論の立場だと違った解釈になる。これらの理論だと、行動様式、観念、規範などを、人間とモノ、そしてその素材を提供する自然環境との相互作用の中で生まれると説くからだ。権力者がいるから神殿が築かれるのではなく、神殿を築き、維持していく過程で権力が生成されると考える。しかもそこでは反復と継続が前提となる。アンデス文明でいえば、同じ形の神殿を繰り返し建設しては壊すことで、一定のこうあるべきだという考えが定着していく。



アンデス北部高地パコパンパ村の祭り。子供の頃から参加する祭りを通して踊りが身体化される。(提供：パコパンパ考古学調査団)

ラテンアメリカの現代の祭礼でも、地元の素材を使った飾りや用

具が準備され、食事が振る舞われることが多い。代々引き継がれてきた輿を担ぎ、舞踊に参加することで、五感を通した所作振る舞いが記憶され、親や先輩からの口伝を守ることで集団における役割を認識する。この反復性は、やがて祭礼という限られた時空間を超えて日常生活全般における各人の所作や思考を規定し、その所作や決まりを守らないと不安定な感情が生まれる。

日本の神社仏閣での参拝方法もこうやって獲得された身体技法であり、寺に行かずとも、何かを祈るときは、思わず手を合わせてしまう。とはいえ、「神殿更新」と絡めるならば、伊勢神宮の式年遷宮や春日大社の式年造替の方がわかりやすい。20年毎に更新することにより、信仰が維持されるばかりか、さらに、その反復の効果は、建築に関わる技術の継承にもつながる。壊すことで内部構造を理解し、技術を五感で読み取る機会が生まれる。昨年末に報じられた「伝統建築工匠の技」のユネスコ無形遺産への登録も、技術の継承と同時に世界観の維持を支援する画期的な出来事といえる。

もしアンデスの「神殿更新」に限った特徴があるとするならば、それは更新により、高さや規模が拡大することであろう。以前の小さな建物を包み込むようにして新たな建物が築かれる。その結果、予想さえしなかった結果が生まれた。高くなった神殿の上で執り行われる儀礼を、周辺で控える人々が目にするができなくなったと思われる。やがては、儀礼を行う人とそれに接近することが叶わぬ人との間で行動に違いが生まれ、社会内部での差異を生じさせ

た。社会階層は神殿建設の産物であって先行するものではない。

ここまでくれば、式年遷宮などと言わずとも、私たち現代社会におけるさまざまな現象を解く鍵が「神殿更新説」に潜んでいることがわかる。携帯電話を発明したことにより、人間の行動や労働まで変貌したことがすぐに想起される。携帯電話が登場して間もない頃、車内での携帯による通話が社会問題になった時期もあったが、いまや通話の光景は希になり、それに代わってスマートフォン画面を見ながら歩く人との接触や事故が問題となっている。携帯の登場時に誰がこのことを予測できたのであろうか。

人類は自らが生み出した装置を使いこなすうちに、予想さえしなかった利用法を覚え、そのために



国立民族学博物館アメリカ展示場にあるサトウキビ搾り器。旧大陸起源のサトウキビは、南米が世界最大の生産地域となり、そこから造られる蒸留酒は、現在の人々の生活や祭りを支える。
(提供：国立民族学博物館)

装置自体に手を加え、人間の活動、すなわち社会自体に変貌をもたらしてしまう。アンデス文明しかり、現代社会しかりである。

私の勤める国立民族学博物館、通称みんぱくでも、文化人類学を推進する研究機関として、人間とモノとの関係を示す数多くの展示を目にすることができる。なかには、伝統的な植物性容器から樹脂製容器までの変遷を示すコーナーもある。自然環境の中から素材を選び、自らが加工した容器が、市場経済の中で樹脂製のものに変化すれば、人間の所作や自然観に変化がもたらされる。それと同時に、樹脂製容器の入手にあたって市場での交渉が求められ、新たな人間関係も誕生する。一方で、伝統的容器を観光用民芸品として売り出すことも多い。その意味で、展示は、伝統の消失に対する危機感を伝えることが目的ではなく、自律的な行動変化を選択する人間のしなやかさ、したたかさを表現しているといえる。

こうした市場経済の浸透スピードは確かに速いが、それでも人間が新たなモノとの関係性を築いていく時間はある程度確保される。

ところが、変化を選択しようにも、その土台を根こそぎ奪われてしまうことがある。それが災害や戦争である。みんぱくでは、3月4日から特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」を開催する。今年で10年を迎える東日本大震災では、津波により祭りや芸能の担い手や演じる場所、そして大切な道具が失われ、モノを通して自らのアイデンティティや世界観を生み出してく場や機会が失われた。みんぱくでは、これまで被災地の芸能を上演する場を提供し、災害記念碑のデータベースを構築するなど、文化面での支援活動を展開してきた。特別展はその集大成である。

人類は今後も災害や困難を避けることはできまい。しかし、そこから立ち上がり、新たな世界観を生み出すには、これまでに熟知し、慣れ親しんできた従来の文化を参照して必要がある。レジリエンス（復元力）とは、文化の豊かさの確保と同義である。このことを気づかせてくれる文明研究、文化研究の持つ社会的意義は大きい。

(せき ゆうじ 国立民族学博物館副館長・教授)

